

津軽ふくらむ

佐々木 佳子 青森

年齢をたしかめてから医者と言ふ「六十でしょ」は仕方ないの意？
六十で魂を一度いれかへようパパッと作る牛井うまし
腰をやむ私だけの椅子おきたればキッチンのみで暮らしていける
大根を煮る十五分キッチンのイスにまどろみ邯鄲の夢
水仙も梅も桜も連翹ももりもりと咲く津軽ふくらむ

フェルメールの青

西垣 純 茨城

朝も晩も眩しさいたく沁み入りぬサングラスのまま病室ごもり
病室のあかりをけしてサングラスかけたるわれは蟋蟀こほろぎに似る
眩しさは視神経からくるものか？ 抗がん剤の副作用なのか？
連綿と廊下がつづき教室にたどりつけない夢ばかり見る
まなうらに青を想へり静かなるときをかなでるフェルメールの青

火曜日の指

三浦 さつき 千葉

いつよりかなづきにひそむことばにて花は始めも終りもよろし
みちばたの花大根を見てをれば通りすがりのひと摘みくれつ
そらまめとさやゑんどうの花ひそか抜け道させてもらふ菜園
火曜日にきまつて電話した友はもうゐないのに指がそはそは
深夜便ラジオにて聞く「月日星ホイホイ」と鳴く三光鳥

〈肌いろ〉

四野宮 和之 東京

五稜郭ここも広さをたとへをり東京ドーム三個はひると
グローバルな世となり消えてゆくのかもほの温かき呼び名〈肌いろ〉
料理人の言ひし言葉が字幕にはそのまま出をり「火いとおします」
にこやかな顔ですグリーンジャケットを囲む松山英樹のチーム
ふくろふが茶店まなかでふり向きぬからだはあちら向きのままにて

いただきます

能勢 玉枝 東京

高架駅にて待ちをればなめらかに電車は春のカーブ回り来
わが内の小磁石やや揺らぎたり桜前線いまどのあたり
気に入りのさくら染めなるシヨール掛けそぞろ行きたし花に酔ひつつ
日常となりつつさびしノブなどを除菌シートで拭いてゐる夜
空豆のみどりふつくら茹であがりまこと阿多福 いただきます

水鳥のほほ

草野 正信*新潟

雪壁のま中あたりに見え始む長岡行きバスの標識
夕焼けのうすきひかりの集まりて神の衣のような雪原
四か月経てあらわれぬ大雪に圧されひらびしミントの葉群
雪どけを喜ぶことば伝えあう雪の色したマスクの下から
水鳥のほほをかすめて来し風と思えば親し春の川風

サイドブレイキ

山田 恵里 愛知

こんなにもからりと白いハクレンの花のしめりを手のひらに知る
北向きのつぼみを開きハクレンのメゾソプラノが空に放たる
不精髭のびた夫にもたれつつ「世界ふれあい街歩き」見る

我が非力愛でのごとくに助手席の夫が下ろすサイドブレイキ
うす紅をほどいて白く咲く桜 桜の背中はいつもさみしい

漕いで漕いで

森 田 治 生 三重

ぶらんこを大きく漕いで漕いで漕いで少女はやがて空へ飛び立つ
樹の上に棲みゐし記憶もつ少女ジャングルジムをぐんぐん登る
半月もすれば新茶となるわかば鈴鹿のふもとに萌黄ひろがる

〈現像〉も〈郵便〉もやがて死語とならむ待つときめきのわれらにありき
正月に逝きしわが犬ブラウニー（ストリートビュー）に今も散歩す

羽化

吉 本 由 美 大阪

草丘に風を呼びゐて白木蓮百の小船の帆をひらきたり

湯沸しのメモリ小さく合はす朝さくらの色に並木ふくらむ

ぱつぱつとジャンパー脱ぎすて陽の下に野球少年の羽化がはじまる

新玉葱スライスすればさりさと月とおひさまの眩きもるる

食べるとは生きて行くことアパートの小さき窓に杓文字がのぞく

花は咲くべく

中西正博 兵庫

なぜいまさら桜かと問はれ空あふぐそれでもさくらとひとはいふらむ
文人が愛せし散歩にほど遠く桜咲く日のわがウォーキング
鳥となり友を見舞はむ桃の花一枝をくはへ窓よりゆかむ
倒されし桜の古木に花咲けりことしの花は咲くべくありて
雛飾る夜の部屋に坐しオルゴール鳴らして一人へひなまつりへ聞く

フラテルニテ

小沢 まき*広島

フラテルニテフラテルニテ孵卵器にいのち九つ転がされつつ
束ねられ吊るされたまま乾きゆく唐辛子たち炎のかたち
引き出しのすき間よりふと鯨型ペーパーナイフのため息光る
どんな時も微笑むのです 添え書きは草々揺らす一行の風
明るさを装う粒子が体から集まれば声 あなた、おかえり

釣糸とばす

海老原 光子 宮崎

若夏を引き寄するごと少年は遠くとほくへ釣糸とばす
大潮の磯に採りたる巻貝は螺旋まると海の味する
をさな児がわれの背丈に届く間は海の日の出の速さと思ふ
みづなかの小石巻き上げ湧き出づる新しき水かくも晶すずしき
許可されし十五分のみのみの面会に伸びる父の髭を剃りたり